

小6算数 「願いを学びの出発点に、問い合わせー価値ー共創へ、仲間と心をつなぐ算数の授業実践」



- ・問い合わせと振り返りを可視化し、学びの意味を共有するためのオクリンクプラス活用
- ・基礎理解を確かめたい児童が、自分の判断で学び直すためのドリルパーク活用

活用背景・ねらい

本校では「誰一人取り残さない」を基軸に、「自分で決めて学びを進める子ども」の育成を進めている。しかし、学年が上がるにつれて習熟度差が広がり、授業についていけず自信を失う児童や、既習内容となり学ぶ必然性を感じにくい児童が同一教室内に混在していた。実践初期の振り返りからは、学習が「どれだけ進んだか」「終わったか」といった量的達成で捉えられ、学ぶ意味や価値を見出しつらい状況も見られた。そこで、学習内容の理解にとどまらず、「何のために学ぶのか」という意味を創り出し、主体的に学びを進める力を育てるこことをねらいとした。

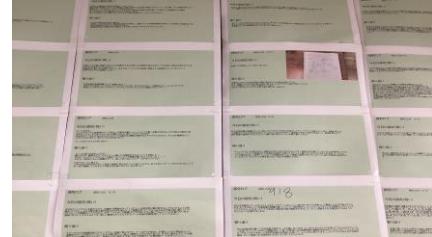
成果・効果

実践を通して、児童の学びには質的な変化が見られた。初期には量的達成を基準とする振り返りが多かったが、次第に自ら問い合わせを立て、「もっと深めたい」「他の人の役に立ちたい」といった視点が加わっていった。後期には、「皆が理解できるように」「苦手な人も算数を好きになれるように」と、他者を意識した問い合わせが多く見られるようになった。国語科で行った学期末の自由記述でも、全体の約4割の児童が算数の学びに言及しており、算数の学習が教科の枠を越え、価値観や行動意識に影響を与えていたことがうかがえた。

授業・取り組みの流れ

① 単元前半における基礎内容の学習と問い合わせの共有

全員で基礎的内容を学習した上で、**そこで生まれた問い合わせをクラスの問い合わせとして共有する**。後半の探究学習に向けて**願いの芽を育む**。



② 学びの振り返りと現在地の可視化

各時の導入では前時の振り返りをオクリンクプラスのカードで共有する。児童は仲間の振り返りから**自分にとっての学ぶ意味や願いに触れる**。自分は**どのような願いをもって学んでいるか、何に課題を感じているかを整理**し、本時の学習に向かう準備を行う。

②多様な問い合わせを可視化



③ 問い（目当て）の設定

児童は、オクリンクプラスのカードを活用し、自分の疑問や深めたいことをもとに本時の問い合わせを決める。**問い合わせ立てたこと自体を児童の願いの発露と受け止め、それを学びの出発点として位置づける**。

④ 探究の成果をレポートでまとめる



⑤ 願いの共有から生まれる学びの共創

まとめでは、本時の探究をオクリンクプラスの提出ボックスに記録し、次に深めたい問い合わせや見出した価値を言語化する。学年全体で**探究の成果を共有し、互いの願いが届き、響き合うことで、学びを個人内の理解から、他者と価値を生み出す学びへと広げていく**。児童は**自分にとっての学ぶ意味や価値を深め、次の学びへと願いがつながっていく**。

⑤共創の場「探究フェス」の全体マップ



小5社会「思考のログ化と即時支援で「分かったつもり」を越える—自動車生産を通した自己調整学習の実現—



- ・問い合わせ・予想・振り返りをカードで蓄積し、思考の流れを可視化
- ・理解状況に応じたヒントカード・資料・URLの即時個別配付による授業内支援
- ・見取りとフィードバックによる学びの充実
- ・年間通した学び方の学び

活用背景・ねらい

これまでの一斉指導や形だけのグループ学習では、子どもたちが「分かったつもり」「調べたつもり」のまま学習を終えてしまう課題があった。社会科では、用語の暗記や資料の閲覧だけでは事象同士の関係や社会の本質に迫ることが難しい。さらに、自由進度学習や個別最適な学びに取り組む中で、教師は児童の理解度やつまずきを授業中に把握しにくく、児童自身も自分の学びが深まっているかを捉えにくいという不安があった。そこで、思考過程をデジタルログとして蓄積し、授業内での学び直しと自己調整を可能にする学習環境の構築をねらった。

成果・効果

マイシードに蓄積された思考のログを活用することで、児童は前時の考え方と現在の考え方を比較し、自分の理解を客観的に捉えられるようになった。教師からのフィードバックや理解度チェックを通して、「分かったつもり」に気づき、自ら資料や振り返りに戻り学び直す姿が見られた。特に学習の定着に課題のあった児童は、教師から個別に提示された資料をもとに、用語の説明だけでなく根拠をもって記述できるようになった。学びの過程を授業中に見取り、支援できることで、児童の自己調整的な学習行動が着実に広がった。

授業・取り組みの流れ

①問い合わせを可視化し、学びの焦点をあわせる

世界と日本の自動車生産や販売の事例を提示し、児童が疑問に思ったことや考えたことをオクリンクプラスに書き出す。集まった問い合わせを全体で共有し、ループリックと照らし合わせながら、授業内で解決する問い合わせと発展的に調べる問い合わせをシンキングツールを使い整理する。教師は、すべての問い合わせを同列に扱うのではなく、学習目標に迫る問い合わせを意識させることで、児童が学びの焦点を絞って学習に向かえるようにする。

②自由進度で調べ、思考を蓄積する

児童は立てた問い合わせをもとに、自分のペースで調べ学習を進める。毎時間、問い合わせ・予想・振り返りをオクリンクプラスのカードに記録し、思考の流れを蓄積する。教師は、後から振り返りや学びを実感できるよう、継続的なログ化を重視する。

③理解を確認し、学び直す

学習の途中で重要語句や資料の読み取りを自分で確認し、理解が不十分な点に気づいた児童は、再度資料を読み直す。教師は、授業内で学び直しが起こることを視野に入れて毎時間のフィードバックや学習を深めるための資料を事前に用意する。

④授業中における個別支援

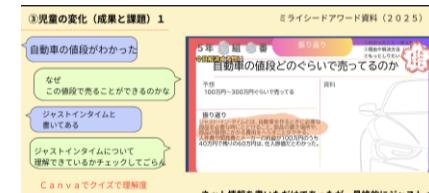
教師は全員のログを確認し、つまずきが見られる児童に対して、ヒントカードや資料、動画URLを事前に用意しておく。それを実態に応じてオクリンクプラスで個別に送信する。「どこを見ればよいか」を明確にすることで、児童が自力で理解を深められるよう支援する。

⑤年間通した学び方の学び

社会的な見方考え方、育てたい資質能力を育成するために問い合わせの立て方、資料の読み取り方、まとめ方を各単元に位置づけ年間通して指導する。



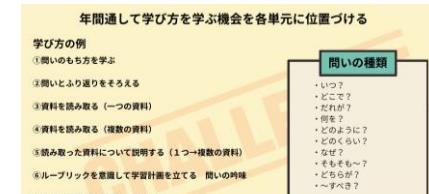
①ループリックに基づいて問い合わせの優先度を決める



③言葉の意味を理解するための学び直し



④振り返りをもとに作成した資料準備



⑤年間通した学び方の学びステップ表

小5国語 「協働で深める読解、ICTで広げる表現 —読む力を書く力へつなぐ学び—」



- ・共同編集による「本文理解の土台づくり」（語句の意味調べ／文章構成・要旨整理を、みんなのボードで共同編集し、理解の抜けを補完）
- ・資料活用の思考可視化と相互評価（集計で「必要／不要」判断を全体化、PDF共有＋コメントで待ち時間なく読み合い・良さを具体化）

活用背景・ねらい

小5国語「資料を用いた文章」を、読む5時間+書く5時間の計10時間で扱うため、従来の紙中心の授業だと、共有や交流に時間が取られ、資料の効果的理 解が浅いままで「書く」へ移りやすいという課題があった。そこで、読む学習は協働で資料と本文の対応・筆者意図まで捉え、書く学習は資料収集～構成～推敲を見通せる環境を整え、根拠に基づき表現を工夫することとする。

成果・効果

みんなのボードを用いた意味調べは82%の児童が「役立った」、協働学習による本文の読解は96%が「一人で学ぶよりもよかった」と回答。資料の「必要／不要」を個で考え、集計で全体化した取り組みは、85%が「資料の効果に対する考えが深まった」と回答し、読む学習を書く学習へつなげることができた。また、文章をPDF化してボードで読み合うことで待ち時間がなくなり、95%が「よかった」と回答。コメントを通して達成感や他者の良さを自身の学習に生かす姿が見られた。

授業・取り組みの流れ

① 読む：初発の感想の共有・共同編集での語句理解（1時間）

児童は本文を読み初発の感想を書く。マイボードで書いてからみんなのボードへ送らせることで、全員の考えが同じ場で見える状態をつくる。また、児童は調べたい語句を出し合い、意味を共同編集で追記する。教師は「共同編集＝効率化」ではなく、語句の網羅性を上げ、後の読解で根拠として使える共通資源にする意図で設計する。

② 読む：資料と本文の対応、資料の効果を協働で整理（3時間）

児童は文章構成や筆者の主張、本文や資料の読解を、それぞれ表にまとめながら捉える。教師はグループごとに共同編集させ、誤操作を防ぎつつ話し合える形にする。資料の効果について考えを深めるために、「絶対に必要／なくてもよい資料」を個で判断し、その理由を言語化する。教師は集計機能で分布を可視化し、多数派・少数派の根拠を比べて考えが深まるように全体交流を組む。

③ 読む：本文を要旨にまとめ、自分の考えを共有（1時間）

児童は本文の要旨と筆者の主張に対する自分の考えをマイボードで書いてからみんなのボードで共有する。良い点をコメントで具体的に伝え合うことで、個々の学びを深める。

④ 書く：資料収集～構成～読み合いで一貫（5時間）

児童は環境テーマを決め、自分の考えに合う資料を探す。資料から読み取ることをカードに整理し、必要に応じて参考サイトのリンクも残す。教師は「何をどう書くか」を事前に1枚のカードで整理させてから文章作成に入らせる。完成後はPDF化してカードに貼り、ボードで読み合う。題名から選んで読み、良い点をコメントで具体的に伝え合って、学びを次の表現に還元する。

④ 書く：資料収集～構成～PDF化した文章（5時間）

④ 書く：PDF化した文章

小5国語 「オクリンクプラスでつなぐ国語の学び ～蓄積から広がる対話力～」



- ・「つむぐんBOX」による単元を越えた学びの蓄積
- ・自分の学びを自由に表現できるピラミッドチャート
- ・児童の主体性を伸ばし、国語好き96%を達成

活用背景・ねらい

国語科では、「話す・聞く・書く・読む」の本質は「分かりやすく伝える」という点で同じである。しかし、**身につけた学びが次の学習や生活に生かされにくいという課題があった**。そこで、各単元で得た学びを蓄積し、必要な場面で自ら呼び出して使える環境を整えることで、「分かりやすく伝える」対話力の育成をねらった。

成果・効果

4月からの実践により、児童の姿に2つの変容が見られた。第一に学習意欲の向上。事後アンケートで**96%が「国語が好き」と回答**し、対話への抵抗感が低下した。第二に対話・思考力の伸長。**88%が向上を実感**し、蓄積した学びを使い、根拠を明確に話す姿が見られた。その結果、男女の壁を越えた助け合いや学び合いが育まれ、**心理的安全性が高い学級づくり**にもつながった。

授業・取り組みの流れ

①学びを蓄積する環境づくり

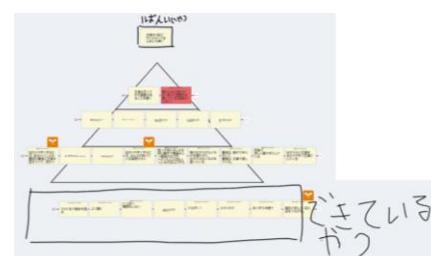
本実践では、児童の**学びを単元ごとに蓄積**し、次につなげていくために「つむぐんBOX」を導入した。「つむぐんBOX」は、ピラミッドチャートの頂点に「自分が大切にしたいこと」を置き、その下に**学びを自由に書き貯める場**がある。児童は、**自分でカードや場を調整しながら、授業で学んだ内容を整理・記録**していく。「つむぐんBOX」を**継続的に活用**することで、単元を越えて学びを生かす土台をつくった。



(1) 児童のピラミッドチャート



(2) 児童のピラミッドチャート



(3) 児童のピラミッドチャート

②学びの蓄積

4月「話す・聞く」単元から、児童とカードづくりを行った。例を示し、**1枚のカードに1つの学び**を記すように指導した。単元終了後に振り返り時間を設け、日常的に「つむぐんBOX」へ**学びを貯める習慣**をつくった。

③「つむぐんBOX」と組み合わせた「話す・聞く」の実践

2学期「よりよい学校生活のために」の単元では、「つむぐんBOX」で**蓄積した学びを活用**し、自分の考えを伝える授業を行った。授業の初めに「つむぐんBOX」から各自が本時で意識したい「めあて（過去の学び）」を選択。**蓄積した学びを活用して対話**できるようにした。また、児童は対話しながら新たな学びを追加した。以下に、単元終了後のピラミッドチャートの例を示す。

(1) の児童は、頂点に「相手の意見のよい所を先に言う」という学びを置いた。チャート内には、本単元の学びや他単元の学びを混ぜながら、**絵や図を入れ整理**した。相手のことを意識した内容の学びが多く見られた。

(2) の児童は、頂点に文章のつながりや自分が話す文章構成の学びを置いた。また、カードの中でも分かりやすく伝える**土台を意識して色分け**した。

(3) の児童は、より強く大事だと考える視点を見付け、頂点より更に上にもカードを配置した。そこには、**説明文で学んだ**、「主張は最初と最後に書く」ことが記してあった。欄外には、自分が既にできているものを**つけ加えた**。このように、オクリンクプラスの操作のしやすさにより、**児童の発想が自由に働き**、学習意欲の向上につながった。他教科でも同様の取り組みを実施しており、年度末に各自どのような学びのピラミッドが完成するか楽しみである。

授業部門 小学校の部 エントリーNO.5

小5図画工作 小6理科「AARサイクル×対話で育てる自律学習—オクリンクプラスによる家庭-学校一貫の学習自己管理」



- ・「みんなのボード／マイボード」での学習計画表・振り返り蓄積による、見通し→実行→振り返り（AAR）の自己調整支援
- ・カード配付（企画書・見方カード等）+提出BOX／コメント・投票による、途中の自己評価と相互参照を起点にした学びの修正・深まり

活用背景・ねらい

PISA2022で「自律学習の自信」に課題が示され、本校でも「自力で学習をこなす」「予定を立てる」「進み具合を評価する」項目が低かった。また、従来の家庭学習は反復中心で自律的な学習設計が不足しており、教科で見方・考え方を自ら働かせて学びを深める力の育成が必要と判断。授業と家庭を通じて児童がAAR（見通す→実行する→振り返る）サイクルを自律的に回せるようにし、対話的・協働的な学びで教科の学びを深めることをねらう。

成果・効果

全校で「もっと○○したい」を見つけられる児童が90%→92%に向上。本学級では82%→93%へ改善。PISAの自律学習関連項目は全校で向上し、担任学級では「自力で勉強をこなす」「予定を立てる」「進み具合を評価する」がPISA平均を上回る結果となった。理科では「どの見方を使えばよいかを考えて学習する」意識が教材配付+指導により有意に高まり、振り返りと自己評価の導入が効果をあげた。

授業・取り組みの流れ

①「解決したい問題」を子供と一緒に具体化する。

導入で見本提示や観察資料を示し、興味を起点に「もっと○○したい」を言語化する。教師は“何をよくしたいか”を整理し、子供が自分事として課題を持つ状態をつくる。

②単元の見通しと使う道具を先にそろえる。

教師は単元計画の立て方を全体で確認し、必要な教材・ワーク・手順動画をオクリンクプラス（みんなのボード）に提示する。企画書や予想・計画・考察カード、学習計画表を配付し、「どこで何を参照できるか」を迷わない設計にする。

③毎時間、学習計画表でAARを回す。

子供はマイボードで「本時のめあて・時間配分・方法」を立てて実行し、終末に振り返りを書く。教師は振り返りを次時の計画につなげ、学びが連続するよう促す（前時の振り返りを基に再計画）。

④途中で“自己評価の場”を入れる。

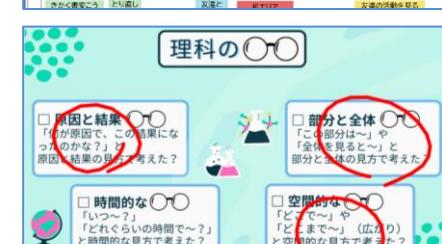
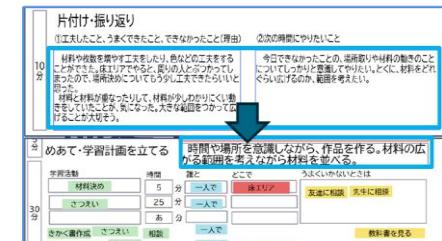
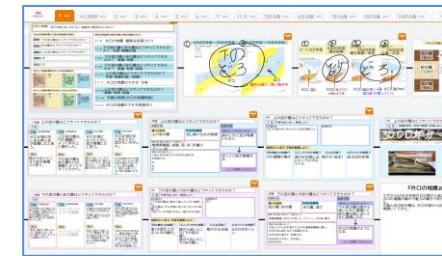
図工では中間評価で、計画と現状を照合して改善点を見つける。理科では見方カードを参照し、確認タイムで「今働かせた見方」を自己評価し、必要な学習へ戻る判断をさせる。教師は自己評価が不十分な子どもには、見方の共有や振り返りの観点提示等で介入する。

⑤他者参照で学びを深める。

提出BOXに作品・考察を出し、コメントや投票で相互評価する。子供は他者の工夫や説明を“次の改善の手掛かり”として取り込み、納得解へ近づける。教師は対話が成果物改善に結び付くよう、見る観点を用意する。

⑥AARサイクルの学び方を家庭学習へ転用する。

蓄積した振り返りを読み返し「学び方」と次に生かす点を言語化する。家庭学習ではカルテで週目標を設定し、1週間計画表で実行・振り返りをし、AARを回す。教師はコメントで学び方を価値付け、翌日の家庭学習の見通しにつなげる。



全学年道徳「“ふつう”を疑う力を育てる — 無意識の思い込みを可視化する体感型ジェンダー学習」



- ・「直感で選ぶ二択クイズ+理由入力」による、無意識の判断傾向と言語表現の可視化
- ・集計結果と事実の比較（理由の言葉の共有／帯グラフ操作ログ）による、思考のクセの自分ごと化と概念更新の促進

活用背景・ねらい

児童は日常生活の中で「男だから」「女だから」といったジェンダーによる決めつけを無意識に受け入れ、それを“ふつう”として捉える傾向があった。従来の道徳授業では、知識として理解しても自分の選択や行動と結び付けて振り返ることが難しかった。そこで本実践では、身近な選択場面を起点に、児童自身の判断や言葉を可視化し、「自分の中の当たり前」がどこから来ているのかを問い合わせ直す力を育てることをねらいとした。ジェンダーを特別なテーマではなく、自分の生き方や幸福と直結する問題として捉え直す土台づくりを目指している。

成果・効果

授業後、教室内では「それは人それぞれ」「どっちでもいい」という発言が自然に生まれ、決めつけを問い合わせ直す姿勢が定着。振り返りでは約9割の児童が「考え方を変えた」「これからの行動を変えたい」と記述しており、価値観の変容が確認できた。生活場面でも、係活動や遊びの選択において男女の枠にとらわれない話し合いが行われるようになった。ICT上に蓄積された選択結果や理由、振り返りコメントは、学びの変化を客観的に示す成果物となり、学級全体の対話の質と安心感の向上にもつながっている。

授業・取り組みの流れ

①直感で選ぶ導入場面

オクリンクプラスを用い「1週間住むならどちらの家を選ぶか」といった正解のない二択問題を提示。児童は直感で選択し、理由を入力。即時集計された結果と理由を共有することで「かわいいから女子向け」「かっこいいから男子っぽい」といった無意識の言葉が多く含まれていることに児童自身が気付く。意図は、ジェンダーを学ぶ前に、自分の思考のクセを自覚されること。



②視点を変えた問い合わせによる揺さぶり

同一の建築物について「男女どちらがデザインしたと思うか」を問う。予想と実際を比較することで、判断が性別イメージに依存していたことが明確に。教師は結果を否定せず事実と並べて提示し、児童が自分の判断を内省できるようにする。



③“らしさ”的可視化と社会との接続

「男らしい・女らしい」とそれがちなイメージをツールで分類し、ICT上で集約・再構成。さらに職業分布やジェンダーギャップに関する帯グラフを操作し、予想と実データを比較。思い込みが社会の不公平につながる可能性があることに視野を広げる設計に。ジェンダー・ギャップ指数という言葉にも触れ、日本は何位か予想しピン集計、指數1位のアイスランドの取り組みについて調べ、日本と比較した考察へ。



④振り返りによる意味付け

最後に「ふつうって何だろう?」という問い合わせに戻り、今日の気付きを言語化。教師は“変化”を特に評価し、学びを自分の生き方に結び付ける。これにより、態度変容につながる学習として定着させている。



小4 体育

「ICTを使っても運動時間を削らない飛び箱運動」
-いくつもの可視化マジックで「できた」を積み上げる実践-

- ・カード複製・選択肢機能で入力時間を減らし、運動時間を確保する授業設計。
- ・「できた！」を可視化し、達成感を積み重ねる工夫。
- ・レベル別練習で、児童が自分に合った学びを選択。
- ・動画と背景透過イラストカードを活用し、技能を客観的にチェック。

活用背景・ねらい

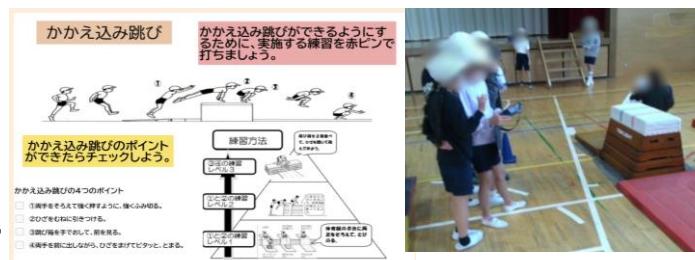
- ・事前アンケートから、飛び箱運動に対し「怖い・痛い・できない」といった苦手意識をもつ児童が見られた。
- ・国の調査等では、体育授業において、ICTを活用した際の運動量の確保と、知識（技の4つの局面の理解）を技能に生かす指導が課題と示されている。
- ・ICTを活用しても運動時間を確保しつつ、児童が自分の課題や成長を実感し、「できた」を何度も味わえる授業を目指した。また、苦手意識をもつ児童も安心して挑戦できる学習環境を模索した。

成果・効果

- ・運動時間確保：児童アンケートでは、「いっぱい練習できた」と回答した児童が約9割。ICTを活用しながらも、十分な運動量を確保できた。
- ・意欲の向上：飛び箱運動を「楽しい」と感じた児童は93.3%となり、学習前と比べて10.5%増加するなど、挑戦し続けようとする意欲の向上が見られた。
- ・技術の向上：各技とも、9割近い児童の「技の出来栄え点数」が向上。点数が下がった児童もいなかつことから、技能面においても確かな成果が確認できた。
- ・手立ての有効性：ICT活用で技のポイントや出来栄えを客観視でき、自分の課題を意識した練習になった。

授業・取り組みの流れ

①オリジナルチェックシート：技の4つの局面のポイントを確認できるチェックシートを作成し、小さな「できた」を何度も積み重ねられるようにした。



技をチェックする児童

②ピラミッドチャートで練習をレベル別に：各技とも3段階に分けた練習方法を提示。苦手意識のある児童も、自分に合ったレベルから安心して取り組めるように配慮。



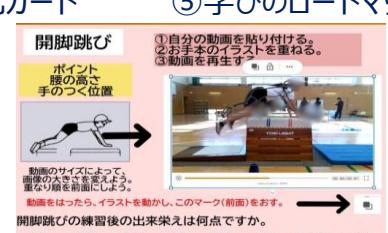
動画を撮影する児童

③課題可視化カード・技の出来栄え確かめカード：カードを複製するだけ、選択肢を選ぶだけの操作にすることで、キーボード入力の時間を減らし、運動時間を確保。



⑤学びのロードマップ

④背景透過イラストカード：透過したイラストを活用することで、技の出来栄えを客観的に捉えられるようにし、児童にとって動画を撮影する意義を明確にした。



③技の出来栄え確かめカード

ICTは、子どもが動きながら学ぶ体育授業を支える道具だと実感した。運動時間を大切にする工夫を重ねる中で、「できた！」という声が生まれ、前向きに挑戦し続ける授業となった。本実践の工夫は、どれか一つからでも試していただくことで、授業づくりのヒントになるのではと考えている。

④背景透過イラストカード

小4理科 「オクリンクプラスで可視化！校庭の地面大調査-自分たちの納得で解き明かす「雨水のゆくえ」



- ・ピン集計によるデータの集約・可視化で、多角的な比較・検討を通して「仮説設定・検証・統合」の支援
- ・4視点のカードによる、自然事象を基にした「自己と他者」とのつながりの可視化により、自らの思考過程を自覚させる振り返りの具現

活用背景・ねらい

AIやICTの活用が進む一方、画面上の情報だけで学びが完結し、理科学習が大切にしている自然事象を基にした事実を収集し考察する力が育ちにくいという課題が出てきている。さらに「雨水のゆくえ」では、条件の制御が難しく教師主導の実験になりやすいため、子どもが納得感をもって概念を形成しにくい。本実践では、校庭という身近なフィールドの調査を自分たちで行い、得られた事実を基に「自己や他者のつながり」を意識することで、子ども自身が概念を更新し続ける主体的な理科学習の実現をねらった。

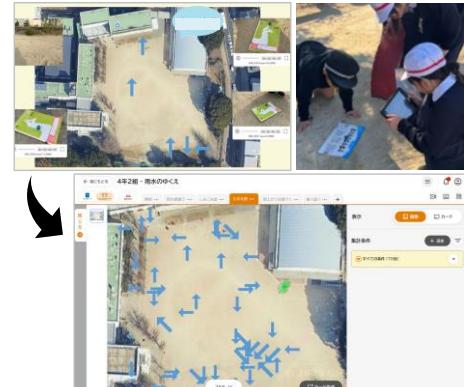
成果・効果

単元末の振り返りでは、雨水のゆくえを「しみこむだけ」ではなく、「低い所にたまる」「土の粒の大きさでしみ込み方が違う」「日向と日陰で乾き方が異なる」など、複数の条件を組み合わせて説明する記述が多く見られた。また、事前の予想と異なる実験結果を基に考えを修正する姿(16/36名)や、データを参照して判断する姿(19/36名)も確認された。自分たちのデータを根拠に説明する経験を通して、自然事象を基に概念を更新し続ける学びの質の変化が見られた。

授業・取り組みの流れ

①校庭を調べ、問い合わせを立てる

子どもは晴れた日の校庭に出て、「雨水はきっとこうなったに違いない」という証拠が残っている場所を選び調査する。校庭の航空写真を貼ったカードに、調べた地点へピンを立て、写真やコメントを記録する。



③の検証での傾き実験のデータ集約

②ピン集計でデータを集約し、仮説をつくる

全員の調査結果をオクリンクプラス上で集約し、ピン集計やキーワード集計で全体傾向を可視化する。教師は結果の共通点や相違点に着目させることで、子どもはデータを根拠に仮説を立てる。



④で作成した雨上がり注意マップ

③仮説に沿って検証する

子どもは仮説を確かめるため、校庭各所の土を使ったしみ込み実験や、傾きを調べる活動を行う。これらのデータも、①と同様に航空写真へのピンや写真、コメントを記録し、調査地点と結果を結びつけて共有し、条件の違いを全体で比較する。さらに子どもの疑問から「かわく」という視点も加え、検証を広げる。



④データを統合し、説明する

蓄積した全員分のデータを根拠に、「みんなのボード」上で雨上がり注意マップを作成する。教師は他者のデータを参照することを促し、子どもは実験のデータを基に対話を通して校庭全体の雨水のゆくえを説明するモデルへとまとめる。

⑤4色カードで、学びのつながりを振り返る

単元を通して4観点のカードを用いて振り返る。カードの色分けにより、子どもが自らの学びの過程を自覚できるようにする。

⑤カードによる4観点の振り返り